



# Pre 医療専攻だより Vol.3

令和2年3月26日

2月26日（水）、一学年で医療専攻を希望する生徒20名を対象に第3回医療専攻講演会が行われました。今回は新潟医療福祉大学 看護学部看護学科教授 松井由美子先生より、「医療の現状と医療従事者になる人の心構え」と題し、お話しを伺いました。以下にまとめます。



講演をお願いした松井由美子先生  
非常にパワフルで、  
明るく熱心にお話しをいただきました

まずは医療の現状について。今年、2020年は「2025年問題」をにらんで大切なタイミングであると指摘されました。ここで言う「2025年問題」とは「団塊の世代」（第一次ベビーブームの1947年～49年に生まれた、多くの人口を抱える世代）が一斉に高齢者となり、日本全体で抱えざるを得ない様々な問題のことを指します。日本は戦後、発展途上国に特徴的だった富士山型の人口ピラミッドから急速に高齢化（高齢人口が増え、若年人口や生産年齢人口が減少する）が進んで、つぼ型の人口構成となりました。そのため、団塊の世代が後期高齢者となる2025年には医療や福祉において大きな課題が出されるのです。例えば病院数の減少や医師不足、認知症患者の急増（2025年には推定470万人にものぼる）、医療費・介護費急増と社会保障

費の急増による年金・保険制度の悪化（年金支給年齢の引き上げ・保険料引き上げ・窓口負担引き上げ）など、多岐にわたります。認知症患者については、電車の中や町の中、そして防災無線放送で時々呼びかけられる失踪情報の数々など、普段私たちが生活している場面の中にも多く見かけることが指摘されました。今後はそれはさらに日常的になってきます。

実は私たちが過ごす生活の中で健康の段階は「健康」か「病気」か、の二択ではありません。病状が刻々と変化する「急性期」、危機的な状況乗り越えて病前の状態に戻ろうとする「回復期（リハビリ期）」、病前には戻らないにせよ病状が安定している「慢性期」、そして死と向かい合う「終末期」があるのです。医療に従事するというとどうしても「救急医療」などの「急性期医療」が華やかで目が行きやすいですが、実は高齢社会となった日本では「回復期医療」、そしてなにより「慢性期医療」が大切になってきます。「急性期医療」を担う一般の病院は二週間で退院を勧められます。一方、「慢性期医療」においては、病院だけでなく、地域包括ケアや在宅医療などのさまざまな手段が大切です。そして作業療法士（OT）や理学療法士（PT）、言語聴覚士など含めた**チーム医療**が重要なのです。特に認知症などの場合は患者本人はもとより、患者家族をいかに支えるか、といった場面ではケアマネージャーが、医師など医療に関わる相談窓口としての医療ソーシャルワーカー（MSW）の存在も非常に大きなものになってきます。「在宅医療」が広がりを見せる昨今、「在宅医療」と「急性時医療」・「慢性期医療」の連携が大切になっています。そのあり方をビデオで視聴しました。



さて、ここで先生はこれから医療従事者＝「医療の専門職」を目指している医療専攻の皆さんに対して「専門職」とはなにか、と問いかけられました。「専門的な知識や資格」・「職能団体（例えば日本看護協会・日本理学療法士協会など）がある」、といったこともあります。しかし、先生が最も強調されたのは「**営利目的ではない、公共の利益を重視するサービスの提供**」の観点です。その現場での意識と行動を見るために、東日本大震災の時の石巻赤十字病院での初動対応のビデオを視聴しました。そこで紹介されたのは地震直後にも関わらず、殺到するであろうけが人を受け入れる準備を着実に進めてい

く医師や看護師などの姿です。彼らが**スタッフの専門職としての高い志**をもって行動しているところが印象的でした。医療専攻を選択した皆さんも、このビデオを通じてその志と行動力に打たれたのではないのでしょうか。

最期に、近年深刻さを増す**児童虐待**の問題も取り上げられました。児童虐待の実体は深刻で、かつ切ないものです。子供達は虐待を受けた父母でさえ、その元に戻ることを切に願うからです。虐待防止への取り組みは福祉だけにとどまらず医療・保健など諸分野との連携によって進められる必要があります。

最後に、チームでの取り組みを理解するアイスブレイクを行いました。五人がチームとなりゲームをすることによって、共同で一つの目標に向かって仕事をすることを体験しました。その上で、チーム医療とは専門職としての自分とチームの一員としての自分を意識すること、そのためにはお互いを尊重し助け合うと共に、自分の限界を知った上で自分に出来ないことをチーム全体で引き受けてもらうこともまた必要であると話されました（真面目な性格の人が、自分ですべて抱えてしまい、自分で自分をつぶしてしまうことも、残念ながらよくあるそうです）。そしてもう一つ、チーム医療に必要なのは「患者の参加」なのだそうです。アメリカではなんとカンファレンスに参加するなど**患者も「チーム医療の一員」**なのだ、と伺い、驚くと共に、なるほど！と目から鱗が落ちた思いでした。



## 《生徒の感想》

- 今回の講演会は、とても楽しく理解を深めることが出来ました。松井さんの明るく、分かりやすい講話と視聴したビデオのおかげで色々なことが学べました。私は、東日本大震災のビデオで職員みんなが、職種関係なく、患者さんのために積極的に動いていた姿が印象に残っています。「働いている人たちも患者さんと同じ被災者なのに、患者さんを優先している」と松井さんが指摘されたとき、泣きそうになりました。専門職として持つべき「無私のサービス志向」がよく分かりました。今の私にはきっと同じように動くことは出来ません。なので、今まで知らなかったことを「そうなんだ」で済ますことなく、もっと自分から調べたり聞いたりして、積極的に行動に移していこう、そして今回を含め得た意識をしっかりと修めて、今後にどんどん活かしていこうと思います。
- 今回の講演を聞いて、「チーム医療」はやっぱり大事だと思った。お互いを尊重し、助け合うこと、すべての人が平等な立場であること、どれも欠かせないことだと思った。そして、今の医療は問題が多く、五年後には社会的な問題になることが分かった。高齢化が進む中、医師などのスタッフ不足も進んでいる。それを知って、改めて「看護師になる」という意識を強くした。今から出来ることは、一生懸命勉強すること、そしてチームに貢献するという意識を高めることだと思うので、日常の中で出来ることは積極的にやっていきたいと思った。